

尾張名所圖會後編 卷六

繼鹿尾山八葉蓮臺寺寂光院



つがのをさん はちえふれん だいじやくくわうあん  
繼鹿尾村にあり。眞言宗、名古屋大須眞福寺末。白雉年中道照和尚の開基なり。和尚は白雉四年夏五月、遣唐使小山上吉士長丹等に隨ひて入唐せしよし「日本書紀」にしるしたれば、歸朝の後の開肇なり。其後養老年中、天竺の善无畏三藏當山に詣でて、自刻の阿彌陀の像を安置し、當國鬼門の鎮護とせし靈場なり。抑當寺の由來を尋ぬるに、當郡下野村に山獵を業とする者ありて、常に此山中を狩り歩行きしが、或日朝より鳥さへ得ずしてたたずむ折ら、谷間より一つの鹿踊り出でければ、難なく射留め、かけ寄りて見るに、其鹿の尾より光明かくやくと照りかゞやきけり。彼者ふしぎの思をなし、よくよく見れば、千手觀音の靈像にてぞ有ける。終に當山に安置し、繼鹿尾山と號けたり。今も前坂の岩に、鹿の足跡くぼみて殘れり。當寺は古杉老松蓊鬱として、閑寂玄隱の古淨刹なり。中にも座禪石より岐蘇川を見下すの光景、籠堂よ

せいなん てうぼう がんかいさうぼう  
り西南の眺望、眼界蒼茫として、山水の美、筆端の及ぶ所あらず。  
ほんぞん せじやくわんおん  
本尊 千手觀音は、當國三十三觀音の一所にして、出現の岩窟裏坂の中央にあり。相傳ふ、日本武尊化現して造り給ふ尊像にて、けいりん  
慶雲三年七月十三日示現し給ひぬ。其時の神詠とて、『なるみがた鹿のつく尾にへだてなく今やなびかん草薙の宮』と、當寺の舊記にしるせり。寺寶 慈覺大師所持の香爐。大日如來・不動尊・毘沙門天共に運慶の作。又名古屋の土菅谷氏より寄附の甲冑は、まつだいらう  
おんすみいん にはごらうざ ちちもんながひで しはたしゆりのすけかついえ  
御黒印。丹羽五郎左衛門長秀・柴田修理亮勝家・佐々市兵衛等のしやうもんすつう またこえんぎしよわわ たぐひはなはだおほ  
證文數通。又古縁起書畫の類 甚多しといへども、これを畧す。

